

1. 問題の所在

梵文『法華経』(以下 *Saddhp* と略記), ケルン・南條 (以下 *KN* と略記) 校訂本, 第 XV 章「如来寿量品」に次のようにある。

KN XV: 322,4^p *mā ca yūyaṃ putrā śociṣṭa. mā ca klamam āpadyadhvam /* (= WT 274,11–12)

君たちは、息子たちよ、憂いてはいけない。(*mā ... śociṣṭa*)。困憊に陥ってはいけない。

いわゆる「法華七喻」のうち、「良医病子」の一節である。良医である父が、毒に苦しむ息子たちに良薬を与える。しかし病苦で気が動転した一部の者たちは飲もうとしない。そこで父はそのような息子たちに言い残す。父は老い先短く、死期は間近い。しかし息子たちよ、君たちは父が死去しようとも挫けるな。私は君たちのため、この薬を与えよう—。

本稿で問題とする *mā ... śociṣṭa* について、*KN* 本は異読を挙げない¹。他方、*KN* 本を受けて再校訂した荻原・土田 (以下 *WT* と略記) 本は、その本文に挙げる語形こそ *KN* 本と同一であるものの、脚注をつけて「*K'*には *śocatha* とあり」と記し、異読の存在を注意する (p.274 の n.1)。

ここにいう *K'*本は河口慧海がチベット滞在中に得た貝葉写本 (の写真版) で、ネパール系統の写本の中でも古い読みを示すものという²。*KN* 本の校訂にはしばしば疑問があると論じられて久しい。この箇所もそうした疑問に付される論点の一つなのかもしれない。

ところで *KN* 本が採用する読み、*mā ... śociṣṭa* については、古典サンスクリット文献にも用例を徴することができる³。また、「古層の仏教梵語文献はアオリスト形を用いることが多い」というテーゼを思起すれば、この *iṣ-*アオリスト形も捨てがたく思えるかもしれない。では我々は *śociṣṭa* と *śocatha* と、いずれの読みを採るべきだろうか？

¹ 南條は異読に採録していないが、彼も利用した T8 写本 (本稿が東大蔵本と呼ぶものに等しい) は 82a8 *śocatha* と読む。

² この写本に対する *WT* 本の「序」の解説を引用する：「…*K'*は、河口慧海氏が滞蔵中、Tsang 州、Shālu-dgon-pa (寺) に於て入手将来せられたるもので、貝葉 181 枚より成り、凡そ 1000 年以前の筆写に係るものと称せられて居る (p.25)」(旧字体は適宜新字体に改めた)。

*K'*本は写し間違いや誤謬が少ないとのことで、*WT* は「有識者の手に成れるものと推定せられ (p.26)」と評価する。

³ PW s.v. 1. *śuc* は *Bhaṭṭikāvya XV 101a mā śociṣṭa* 「[君たちは] 憂いてはならぬ」を引用する。*Bhaṭṭi* は 6 世紀ないし 7 世紀の詩人・文法家。なお、以下の註 6 をも参照。

もちろんこの際、誰であれ、古写本の読みを採りたくなるであろう。しかしこの選好は合理的と言えるだろうか？ なるほど K 本の読み (*socatha*) は、明らかに中期インド語の文法の影響下にある⁴。これは、梵文『法華経』形成期の言語状況を伝える、重要な異読であると考えられることもできる。ではこの判断はどれほど客観的・科学的と言えるだろうか。

この小論は、このような問いを立てて回答のための資料を收拾し、はるか将来に想定される批判的校訂本の校訂作業に資そうとする試みである。

1.1. 本稿の論点概観

動詞 *soc / śuc* は、古くは「輝く；白熱する，灼熱する」の語義を、Br. 時代以降に「苦しむ」「悲しむ」の語義を持つ⁵。現在形は、RV 以来 thematic の *soca-*^{ti} である。アオリスト形は RV 以降、*a*-アオリスト（例えば RV VII 9,4 *aśucat*）が用いられるが、VS など一部の文献で孤立的に *i*-アオリスト語形の *āsocīh* を呈する（→ 2.）。

パーリ文献は、*soci, socittha* といった *s*-アオリストに基づく形を伝える一方、現在語幹の命令法に基づく *mā socatha* の語法をも示す（→ 3.）。

仏教混交梵語文献のうち、最古層に属する Mahāvastu に見られる語形は、ほぼ全面的に現在形である（→ 4.）。禁止法についても、同様に現在語幹の命令法が用いられるのが通例である。原 Saddhp でも、Mahāvastu とほぼ同様の状況であったと仮定してよいであろう。結論的には、問題の箇所には *mā ... socatha* の読みを採るべきと考えられる（→ 5.）。この際、写本の状況を見ると、R 系統写本群は共通して *sociṣṭa* の読みを示唆する。この特異な現象は、R 系写本の強固な結束の由縁を示唆するかもしれない（→ 5.1.）。

2. ヴェーダ文献の状況

soc / śuc の現在形は Rg-Veda 以来、thematic の *soca-*^{ti} であり、これは歴史を通じて変わらない。たとえば：RV VI 16,11 *tām tvā samīdbhir aṅgiro ghṛtēna vardhayāmasi / bṛhác chocā yaviṣṭhya* // 「そういう君を焚き木たちでもって、アンギラス (= Agni) よ、グリタでもって [我々は] 増大させる。高く輝け (*soca*)、最も若き者よ」。

新層ヴェーダ文献から例を挙げれば、たとえば：Chāndogya-Upaniṣad VII 1,3 *so 'haṃ bhagavaḥ śocāmi* 「そういう私は、貴殿、憂いています (*śocāmi*)」。韻文ウパニシャッド文献の例を挙げると：Kaṭha-Upaniṣad II 22cd *mahāntaṃ vibhum ātmānaṃ matvā dhīro na śocati* // 「偉大な、遍在するアートマンを思考した後では、賢者は憂えない (*na śocati*)」。

アオリスト形については、RV 以来、*a*-アオリスト形が用いられる：RV VII 9,4b *samanagāś ūsucaj*

⁴ サンスクリット語の2人称複数命令法語尾は *-ta* である。ここに見られる *-tha* はパーリ語にみられるものと同様の、直説法語尾の転用で、中期インド語的な語形といえる。

⁵ 以下、語史の概略については GOTŌ, I.Präs. 306–308 ; NARTEN, *s-Aorist* 256–257 を参照。

jātavedāḥ / 「集会の場へ赴く者たる *Jātavedas* は輝いた (*aśucat*)」。a-アオリスト形は、後述する *Kāthaka-Saṁhitā* のほか (次段落の引用句の並行情報を参照), *Taittirīya-Brahmaṇa* にも見られる: TB III 7,6,19 *téna sahasrakāṇḍena, dviśāntam śocayāmasi; dviśān me bahú śocatu; óśadhe mó ahám śucam* 「そのことによって、千の部分を持つ [Agni] によって、[我々は、私を] 憎む者を苛む。私を憎む者は、大いに苦しめ。薬草よ、そして私は憂えぬよう (*mā... śucam*)」。

他方, *Taittirīya-Saṁhitā* で重複語幹アオリスト形が, *Vājasaneyin* 派の文献を中心に一部で *iṣ-*アオリスト形が存在する⁶: *Vājasaneyi-Saṁhitā* XI 45c *mā dyāvāpṛthivī abhīśocīh* 「[Agni は] 天と地とを焼き掛けるな (*mā ... abhī śocīh*)」 (> ŚB VI 4,4,4) ~ TS IV 1,4,3 = TS V 1,5,6 [... *abhi śūsucah*]⁷ ~ KS XVI 4: 224,14 [... *abhī śucah*] (> XIX 5: 6,3) ~ MS II 7,4: 79,4 [... *himsīh*]; VS XII 15c *máinām tápasā mārcīśābhī śocīh* [KS *abhi śucah*] 「当の彼女 (大地) を, 熱で以て, 光で以て [君, Agni は] 焼き掛けるな (~ KS XVI 8: 230,8)」 ~ MS II 7,8: 85,18 *máinām arcīśā mā tápasābhī śocīh* [TS °*bhī śūsucah*] 「当の彼女 (大地) を, 光で以て, 熱で以て [君は] 焼き掛けるな (~ TS IV 1,9,3=IV 2,1,5)」。

恐らく NARTEN (1964: 256-257) が説明するように, この *iṣ-*アオリストの形は a-アオリストの形に対して孤立的で, アオリストであることを特に特徴づけるための *one-off* 的な新語形なのであろう。これに対して a-アオリストに基づく語形は RV 以来, 学派の別にかかわらず KS, TB に在証され, 遠く *Mahābhārata* にもその跡を辿ることができる (→ 補論)。使用範囲のひろい, この a-アオリスト語形こそが, より普通の語形であったものであろう。

3. パーリ文献の状況

パーリ文献にみられる現在形は *soca-*ⁱⁱ である。この語形は, 音韻の変化を被ってはいるが, ヴェーダ語の *śoca-*ⁱⁱ に等しい。用例は, たとえば: Sn 185ef *asmā lokā paraṃ lokam, katham pecca na socati* 「この世からあの世へと行ったのち, 如何にすれば, ひとは憂えない (*na socati*) のか」。

2人称複数であれば, 以下に見るように *socatha* の形をとる。

Jā III 204,19-20^m *amittahatthagatā tacasārasamappitā
pasannamukhavaṇṇātha kasmā tumhe na socathā ṭi*

「味方ならざる者の手中に落ち, 竹 (の拘束具) をはめられているのに, この際, 晴れやかな顔色をしている。何故, 君たちは憂えない (*na socatha*) のか」と。

⁶ 後述 3 節, パーリ文献に見られる 2 人称の *soci* は **śocīs* に相当する。また *Bhāṭṭikāvya* XV 71c *arodīd rāvaṇo śocū* 「Rāvaṇa は立いた, 憂えた」も, 上掲の VS・ŚB (および MS の一部) と同様の語形成法に従う語形といえる。

⁷ *Taittirīya* 学派に属するものの, *Taittirīya-Āraṇyaka* はむしろ MS IV の並行句に近似する読みを示す: TA IV 20,2 *mā dyāvāpṛthivī hīḍīśātām* 「天と地とは怒るな (~ MS IV 9,12:133,5-6 *mā no dyāvāpṛthivī hīḍīśethām*)」。

この2人称複数直説法の語形, *socatha* は, *Saddhp* の古写本に見られる2人称複数命令法 *śocatha* の語形に等しい (前註4参照)。

アオリスト形については, 二人称単数の *soci* や二人称複数の *socittha* といった, *s* アオリストに基づく語形が見られる⁸。以下, 禁止法の用例, *mā soci* と *mā socittha* との例を *Dīgha-Nikāya* および *Jātaka* によって例示する。

悲嘆にくれるアーナンダを宥めて, 世尊が言う : DN II: 144,10 *Alaṃ Ānanda mā soci mā paridevi* 「もう充分だ, アーナンダよ。憂えるな (*mā soci*), 嘆くな」。世尊が亡くなって後, 悲嘆にくれる同僚たちを宥めてアヌルッダが言う, DN II: 158,6 *Alaṃ āvuso mā socittha mā paridevittha* 「もう充分だ, 友よ。憂えるな (*mā socittha*), 嘆くな」⁹。

Jātaka でも同様である。妻を失って悲しみに沈む王を宥めて, 両親をはじめとする人々が言う : Jā II: 156,2 *mā soci mahārāja, aniccā saṃkhārā ti* 「憂えるな (*mā soci*), 大王よ。諸行は無常なのです, と」。弟子の *Dhammapāla* 童子の実家に赴き, 彼の死を偽り告げて, その父ないし一族を宥めて師匠が言う : Jā IV: 52,14-15 *sabbe saṃkhārā aniccā, mā socitthā ti* 「一切諸行は無常なのです, [あなた方は] 憂えるな (*mā socittha*), と」。

その一方, *Saddhp* の古写本に見られる *mā śocatha* に等しい語法もみられる : *Therī-Apadāna* II 123 *Buddho tassa ca saddhammo, anūno yāva tiṭṭhati; nibbātuṃ tāva kālo me, mā mam socatha puttikā* 「仏陀が, そして彼の正法が, 欠けることなく存する間, その間に私の涅槃すべき時がある。私について, 憂えるな (*mā... socatha*), 娘たちよ」。

本来, 禁止法には二種の区別がある¹⁰。ヴェーダ文献に見られるようなアオリスト語幹による禁止法は「禁止」を意味する (*prohibitive*)。正しくは, 現在語幹による禁止法は「停止の要請」を意味しよう (*preventive*)。しかしこの *Therī-Apadāna* のような用例には, そのような厳密な使い分けは見出しがたい。以下に見る *Mahāvastu* や *Saddhp* においても同様の, あるいは更に混同の度合いが進んだ状況にあったものかと思われる。

4. Mahāvastu の状況

仏伝文献のひとつ, *Mahāvastu* においても同様に, 現在形は *śoca-ⁱ* である : Mv III: 539,6^m *na hi <so> śocati yo nirupadhiḥ* // 「もし執着がないひとであれば, [彼は] 憂えない (~ Ed. SENART III:

⁸ これらの語形は多く, 禁止法で用いられる。その他の例としては, 例えば : Jā IV 125,25-26 *Rāmapaṇḍito n'eva soci na rodi* 「賢者ラーマは憂いもしなかつたし, 泣きもしなかつた」。

⁹ 並行句は, さらに DN II 162,29 (*Subhadda* の言葉として) および DN II 162,35 (*Mahā-Kassapa* の言葉として) にも存する。

¹⁰ このことについての簡便な説明は GOTŌ, *Morphology* の p.90 にある (詳細は : K. HOFFMANN, *Der Injunktiv im Veda*, 1967)。

418,5^m *na hi śocati yo nirupadhīh* // ¹¹。

2 人称命令法であれば、単数形の *śoca*, *śocāhi* を数例、確認できる。関連箇所のみ引用すれば以下の通り : Mv II: 284,8^m *mā śoca pārage tvam* 「Pāragā よ、君は憂えるな (= Senart II: 229,12^m)」 ; Mv III: 256,13^p *mā mahārājā* [Ed. SENART °rāja] *śoca* 「大王よ、[君は] 憂えるな (~ Ed. SENART III: 205,3-4) ; Mv II: 271,11^p *pārage mā rodāhi mā śocāhi* 「Pāragā よ、泣くな、憂えるな (= Ed. SENART II: 218,13^p)」。確認できる計 3 例、すべて現在形による禁止法の用例である。

アオリスト語形については、確実な語形は 3 人称複数形 *śocensuh* である : Mv III: 81,1-2 *te dāni sarve pañca vāñjakaśatā tāsām strīṇām mūlāto ekānta pratyukrāntā, ekāntam pratyukramitvā rodensuh śocensuh paridevensu* 「さて彼ら皆、五百人の商人たちは、その女性たちの許から一隅へ歩み出た。歩み出ると、泣き、憂い、悲しんだ (~ Ed. SENART 69,6-7 ... *pañca ... ekāntam pratyukrāntā ekāntam pratyukramitvā ... paridevensuh* //)」。この語形は、他に Mv III 527,17-18 ... *rodensuh, krandensuh, śocensuh, paridevensuh* / (= Ed. SENART 409,9) に見られる。泣き、叫び、憂い、そして悲しむことをいう定型句的な表現と見える。

さて、管見の限り、他にアオリスト語形として挙げることができる例は 2 人称単数・中動相と判定される *śociṣṭhāh* のみである。以下に、Ed. SENART によって示す。

Mv III: 134,19-20^m *gajavara* [MARCINIAC °varo], *mā kṛśo bhava, praṭiccha bhaktam pibāhi pānīyam / abhirāmayiṣyāmi idha purottame mā khu śociṣṭhāh* [MARCINIAC *śocittha*] // (~ Ed. MARCINIAC 164,6-7)

「象の最良の者よ、痩せてはならない。食事を求めよ、飲み物を飲め。私は [君を] 楽しませよう、ここ、最高の都市で。[君は] 憂えてはならない (*mā ... śociṣṭhāh*)」。

象王に対する一連の動詞は 2 人称単数であり (*bhava, praṭiccha, pibāhi*), *śoc* にも無論、2 人称単数が期待されよう。しかしこの文脈に適った、また文法的に正しそうな読みも、Ed. MARCINIAC 164,7 の読み (*abhirāmayiṣyāmi idha purottame <mā> khu śocittha* // 「私は [君を] 楽しませよう…

¹¹ MARCINIAC は、写本も Ed. SENART も *so* を持たないものの、Sn 34d *na hi so socati yo nirupadhī ti* を参照し、haplogy で *so* が消えたとして補うべきと注記する。

以下に見るように、Mahāvastu では一部で *soca*-ⁱⁱ の読みが見られることを想起すれば、この見解には従うべきかと思われる : Mv III: 54,11^m *datvā na śocāmi na tapyāmi tam* / 「[布施を] 与えた後、[私は] 憂えないし、それを悔いもしない (~ Ed. SENART 46,19^m *datvā ... nānutapyāmi* /) ; Mv III: 470,8^m *kiṃ so vahitvā na kadāci śocati* / 「何を殺せば、ひとは憂えることがないのか」 (~ Ed. SENART 370,1^m ... *vadhivā ...*) ; Mv III: 470,11^m *krodham vahitvā na kadācic chocati* 「怒りを殺せば、ひとは憂えることがない」 (~ Ed. SENART 370,4^m ... *vadhivā ... kadāci śocati*) ; Mv III: 539,3-4^m *soceṭi putreḥi putrimām gopika gobhis tathaiva ca śocati* / 「息子を持つ者は息子たちによって憂える ; 牛飼いは牛たちによって、まさしく同様に憂える」 (~ Ed. SENART 418,2-3^m *socati ... gomiko gohi tathaiva śocati* /)。

「君たちは」憂いてはならぬ」)を知れば、疑問符を付すべきかもしれない¹²。

前掲, Jā IV: 52,15 *mā socitthā ti* を想起したい。これはバラモンの家長に2人称複数形で語りかけたものである。これがその背後に控える(と、想定される)一族郎党を含めての複数形と解せるなら、象王に対しても同様の語法が許されよう。もしこの仮定が正しいなら, Ed. MARCINIAK の *socittha* は Pāli *socittha* (= Skt. *śociṣṭa*) の後裔に位置づけ得る。

付言すれば *Mahāvastu* を通じて, *soc* の活用形として確認できる語形は, この *sociṣṭhāh* を除いてすべて能動相である。この中動相語形, *sociṣṭhāh* はこの点でも危ういように思われる。

5. 梵文『法華経』の状況

Saddhp に *soc* / *śuc* の用例は多くない。KN (ないし WT) に即していえば, 管見の限り定動詞形は4例のみで, 本稿で課題とする KN XV: 322,4^p *śociṣṭa* (= WT 274,16) を除いてすべて現在語幹の活用である¹³。以下, 用例を挙げる: KN III: 60,5-6^p 「... *tad-anyān bodhisattvān dṛṣṭvā bodhisattvānām cānāgate 'dhvani buddha-nāma* [WT *buddhanāmam*]¹⁴ *śrutvā tīva śocāmy atīva samṭapye* 「[私は] 別の菩薩たちを見て, そして菩薩たちの, 未来における仏としての名を聞くと, 過度なほど憂えます (*śocāmi*)¹⁵, 過度なほど苦しみます… (~ WT 59,7-9)»; KN IV: 111,3^m *pītā ca taṃ śocati tasmī kāle* 「そして父は, その時, 彼について憂える (*śocati*)¹⁶ (= WT 103,17)»; KN XV: 322,6-7^p *te tasmīn samaye tīva śoceyur atīva parideveyuḥ* / 「彼らがその時機に際して, 過度なほど憂えるとしよう (3. pl. opt. *śoceyur*)¹⁷, 過度なほど悼むとしよう (= WT 274,15-16)。

¹² Ed. MARCINIAK はこの語に“Sen. *śociṣṭhāh*; for the 3 sg. aor. ending *-ittha*, cf. BHSG § § 32.41, 42.”との註をつける。恐らく Ed. MARCINIAK *socittha* が本来的な読みで, パーリ語の *socittha* に等しいものであろう。

¹³ 以下, 本稿で利用するテキストは KN 本・WT 本のほか, ネパール系写本としては Cambridge 蔵本 (書写年代ネパール暦 185 [西暦 1064/1065] 年); 北京本 (書写年代西暦 1082 年); 大英図書館蔵本 (KN 本脚注に言う B 写本, 書写年代 11-13 世紀); Kolkata 本 (インド・コルカタ・アジア協会蔵梵文法華経紙写本 No.4079, 書写年代ネパール暦 800/801 [西暦 1679/1680] 年); 東大蔵本 (No.414, 書写年代 17-18 世紀)。ギルギット本 (7 世紀以降とみなされる) は渡辺校訂本, カシュガル本 (9-10 世紀と言われる) は TODA 校訂本。

¹⁴ KN には *buddhanāma* とある。この読みは Cambridge 本 19a4, 大英図書館蔵本 25b1, Kolkata 本 28a1 に支持される。北京本は *buddhānāmanti* と読み (p.59,9), 季は *buddhanāma* を提案する。WT は *buddhanāmam* と訂正するが, この読みは東大蔵本 17a7 に支持される。カシュガル本は *nāmadheya-vyākaraṇa-śabda-* と読み, やや増広の気配を示す如くである。ギルギット本には欠落。

¹⁵ 諸写本の読みは, *śocāmi* (ないし *socāmi*) と *śocyāmi* とで二分される: Kashgar 65a1 = Gilgit B 202,7 = 北京本 59,9 = 東大蔵本 17a7 *śocāmy* ~ Kolkata 本 28a1 *socāmy*; Cambridge 本 19a5 *śocyāmy* ~ 大英図書館蔵本 *socyāmi*。

¹⁶ 諸写本の読みは, *śocati* (ないし *socati*) でほぼ一致する: Kashgar 114b4 = 北京本 101,31 = Kolkata 本 51b6 *śocati*; 大英図書館蔵本 47a4 = 東大蔵本 30b5 *socati*。Gilgit A 47,32 = Gilgit B 230,14 *socayi* は孤立的だが, 単純な誤記かもしれない。Cambridge 本はこの箇所, 欠損。

¹⁷ 諸写本の読みは: Gilgit A 115,4 = 北京本 271,6 *śoceyur* ~ Kashgar 311b6 = Cambridge 本 106a1

分詞形については、現在分詞形を1例数えるのみである：KN IV: 111,4^m *śocantu so dig-vidiśāsu h'amce* [WT añce] 「憂えながら (*śocantu*)¹⁸、彼は四方四維を [探しながら] 往くとしよう (WT 103,19^m)」。

上掲の諸例においても異読は見られ、多少の「振れ幅」がある。とはいえ、本稿の課題である KN XV: 322,4^p *śociṣṭa* (= WT 274,16)¹⁹における異読は、ギルギット本やカシュガル本といった古層写本群が現在語幹を用い (Gilgit A 115,1 *śoca* ; Kashgar 311a7-b1 *śocatha*)、ネパール系写本群の古層にも対応が見られる一方 (北京本 271,1 *śocatha* ~ Cambridge 本 105b5 *socatha*)、Kolkata 写本のような一部新層写本がアオリスト語幹を用いており、明白な対立を示す。この差異は何を示唆するであろうか。

5.1. 写本伝承との関係：R 系統写本群の状況

筆者が写本群の読みを見る限り、KN 322,4 *śociṣṭa* の読みは、主としていわゆる R 系写本群に支持されるものと思しい (T4, T5, T9)。紙写本のうち、R 系に部分的に一致するという A3 も同様である。とはいえ、R 系に「部分的によく一致」²⁰する類に入る T8 (= 東大蔵本) が *mā... śocatha* と読むこと、前述のとおりである (→ 註 19)。

これら R 系写本群の読みに見られる現象を如何に評価すべきか。

もちろん R 系写本の読みが、原 Saddhp テキストでは *śociṣṭa* (ないしパーリ語に証される対応形、*socittha* または Mahāvastu の Ed. MARCINIAK 164,7 *śocittha*) と読んでいたものを伝える超保守的なものである、と想定することも可能ではある。時期的に先行する Kolkata 144b1 *śociṣṭa* もアオリスト語幹を支持することは、この仮説を支持するかもしれない。しかし Kolkata 本および R 系写本群の祖形に **socittha* (> *śociṣṭa*) を想定した場合、他のネパール系写本群やギルギット伝本との関係、さらに中央アジア伝本であるカシュガル本との関係の説明に一考を要する。

例えば「共通祖形 **socittha* は Kolkata 本および R 系のみで伝承される一方、そこから二次的に現在語幹化した **socatha* または *śocatha* からカシュガル本、ギルギット本およびネパール系写本群が派生する」といった想定は、やや複雑にすぎよう。あるいは「**socittha* / *śociṣṭa* 伝本＝

śoceyuh ~ Kolkata 本 144b3 *soceyuh* ~ 東大蔵本 82b1-2 *soceyur* であり、3人称複数・能動相・希求法であることは一致する。大英図書館蔵本はこの箇所、欠損。

¹⁸ 諸写本の読みは：Gilgit A 47,34 *śocanta* (~ 北京本 102,1 *śocamta*、季は *śocantu* との訂正を提示する) 対して Gilgit B 230,16 *śocantu* ~ 大英図書館本 47a5 = Kolkata 本 51b6 = 東大蔵本 30b5 *socamtu*、いずれも現在分詞を意図することは違いない。Cambridge 本はこの箇所、欠損。カシュガル本はこの箇所、読みを違える。

¹⁹ 諸写本の読みは：Kashgar 311a7-b1 = 北京本 271,1 = 東大蔵本 82a8 *śocatha* ~ Cambridge 本 105b5 *socatha* に対して Gilgit A 115,1 *śoca* (脚注は *śocata* との訂正を提示する)。以上、現在語幹であることは共通する。人称語尾で不一致があるものの、*śocatha* の読みが優勢である。本来的な読みと解してよかろう。他方、Kolkata 本 144b1 *śociṣṭa* はアオリスト語幹を示す。大英図書館蔵本はこの箇所、欠損。

²⁰ 小槻 [2005: 202] 「A2, A3, T8, P3 等の紙写本が、この「R 系」に部分的によく一致する」。

Kolkata・R 系写本群と、他のネパール系写本群・ギルギット伝本・中央アジア伝本(いわば*socatha / śocatha 伝本ということになる)とは別個の系統である」との想定も可能かもしれない。いずれにせよ従来の研究が想定する写本系統樹の理解と整合しまい。

そもそも、もしも最古層段階から文法的に望ましい、その意味で優れた読み(*sociṣṭa)が存在したのなら、その分布範囲が極めて限定的であることにも説明を要するであろう。永い伝承史のなかで、善本をもとめて複数の写本を入手し、校合する試みは、一再ならず行なわれたであろう。仮称「*socittha / sociṣṭa 伝本」のみがその機会を逸し続けてきたと考えるのは困難である。

むしろ、原 Saddhp では*socatha または*socatha と読んでいたものが、中央アジア系のカシュガル本には śocatha と伝承され、ネパール系写本群は一般に socatha ないし śocatha と伝承したと見るのが素直であろう。ギルギット写本の śoca の読みは、2人称複数形の śocatha を正しくサンスクリット訳(*śocata)できなかつた、または語尾の-ta(ないし-tha)を誤って書き落とした語形と評価されよう²¹。

おそらく Kolkata 本の sociṣṭa や R 系写本群の sociṣṭa の読みは、相当後代の、しかもサンスクリット文法に深い知識を持つある個人(ないし集団)が中期インド語形に由来する śocatha を「正しく校訂」した、後代のサンスクリット化の所産であろう²²。

結論的には、KN 322,4 mā... sociṣṭa については、原『法華経』を意識する場合には古写本に準じて śocatha の読みを、他方で R 系写本群に基づく校訂本を作成する際には sociṣṭa の読みを採用すべきであろう。この判断には、おそらく異論はないものと思われる。たとえば戸田宏文は、2人称複数命令法に-tha を用いる例を列挙するうち、KN 322,4 に対して中央アジアの2写本(カシュガル本およびH写本)の mā... śocatha と河口本の mā... śocatha を列挙する(『覚書(四)』p.102)。彼は、こうした中期インド語的環境こそ、Saddhp の原状態であると信じていただろう。

補論 Mahābhārata が伝える a-アオリスト語形

Mahābhārata では、現在形は無論、thematic の śoca-^{ti}を示す。しかし a-アオリストによる禁止法が見られることは注意を惹く(→ 2.)。管見の限り、数例を挙げてみよう。

²¹ 後者の蓋然性が高いものとする。類似の例として、Kashgar 86a3 abhiramatha に Gilgit A 32,32 ramata が対応する例を挙げることができる。なお、(abhi-)ram は通例、中動相を採るため、サンスクリットとしては KN III: 79,7^p abhiramadhvam が正統的である。もちろん、Saddhp の原型では ramatha ないし abhiramatha であったものと推定されよう。この点については、笠松「梵文『法華経』諸伝本における動詞 ram の現在語幹の変遷」『論集』47号(2020)を参照されたい。

²² 小槻 [2017: 205]: 「R が書写されたのは、ネパール暦 923 年(1801/1802 年)であることが分かっている。T4 の書写年はネパール暦 927 年(1805/1806 年)、T5 と T9 の書写年は、奥書にその記述が無いので不明だが、R や T4 の前後 2-3 年の間隔をあけて書写されたと推定される」。

筆者としては、この is-アオリスト形は、教養高い写字生たちがこうした紙写本群を製作する際に施したサンスクリット化の所産である蓋然性が高いと考える。

Kṛṣṇa が、Pāṇḍava たちの庇護を受けられなかったと嘆く Draupadī を宥めて曰く、

MBhār III 13,116 *yat samarthaṃ pāṇḍavānāṃ tat karisyāmi mā śucaḥ /
satyaṃ te pratijānāmi rājñāṃ rājñī bhaviṣyasi //*

「Pāṇḍava たちに相応しいことであれば、私はそれをなそう。[君は] 憂えるな (mā śucaḥ)。君のため、真実を [私は] 認知しよう。[君は] 諸王の王妃となるであろう。

これは a-アオリストの 2 人称単数能動相である。同様に、Nala 王に捨てられて嘆く Damayantī を宥めて苦行者たちが曰く、

MBhār III 61,68 *dṛṣṭvaiva te paraṃ nūpaṃ dyutiṃ ca paramām iha /
vismayo naḥ samutpannaḥ samāśvasiḥi mā śucaḥ //*

「君の最高の姿を、そして最高の輝きをここに見ると、我々には驚愕が起こった。[君は] 安心せよ。 憂えるな (mā śucaḥ)」²³。

さらに Bhagavad-Gītā XVI 5 にも見られる。これはよく知られた例であろう。

BhagGī XVI 5 *daivī sampad vimokṣāya nibandhāyāsūrī matā /
mā śucaḥ sampadam daivīm abhijāto 'si Pāṇḍava // (= MBhār VI 38,5)*

「神々に属する運命は解脱へと [向かう] ; アスラに属する運命は繫縛へと [向かう、と] 考えられる。[君は] 憂えるな (mā śucaḥ)。[君は] 神々に属する運命に生まれついたのだ、Pāṇḍu の息子よ」。

叙事詩時代には、話者をとりまく言語環境が中期インド語的なものであったことは疑いない。日常的には、パーリ文献にみられるような s-アオリストを基礎とする語形が優勢であったものと思しい。にもかかわらず MBhār が RV や TS、TB に連なる a-アオリストに基づく禁止法を伝えることは、叙事詩の伝承を担った人々の出自を伺うに際して示唆的かもしれない。

(2021 年度・科研費・基盤 C 「梵文『法華経』形成史および伝承史解明のための文法学的研究」(課題番号 20K00067) による成果)

²³ この d pāda の並行は他に、Nala 王物語を話し終えて Bṛhadāsya が Yudīṣṭhira を慰撫する談話中にも見られる : MBhār III 78,11 *asthiratvaṃ ca saṃcintya puruṣārthasya nityadā / tasyāye ca vyaye caiva samāśvasiḥi mā śucaḥ //* 「そして人間の財には永続性がないことを、常に考察して、その来訪について、そしてまさしく喪失について、[君は] 安心せよ。 憂えるな (mā śucaḥ)」。

略号

DN : Dīgha-Nikāya	RV : Ṛg-Veda
Jā : Jātaka	Saddhp : 梵文『法華經 (Saddharmapuṇḍarīka-Sūtra)』
KN : ケルン・南條校訂版 Saddhp	ŚB : Śatapatha-Brāhmaṇa
KS : Kāṭhaka-Saṁhitā	SN : Saṃyutta-Nikāya
m : 韻文部分	Sn : Sutta-nipāta
MBhār : Mahā-Bhārata	TB : Taittirīya-Brāhmaṇa
MS : Maitrāyaṇī Saṁhitā	TS : Taittirīya-Saṁhitā
Mv : Mahāvastu	VS : Vājasaneyi-Saṁhitā
P : 散文部分	WT : 荻原・土田校訂版 Saddhp

参考文献

- Ānandāśramasamskṛtagranthāvaliḥ 36 1937, 1939 Kṛṣṇayajurvedīyaṃ Taittirīyāraṇyakam Śrīmatsāyaṇācāryaviracitabhāṣyasametam. 3rd ed. Poona
- Ānandāśramasamskṛtagranthāvaliḥ 37 1979 Kṛṣṇayajurvedīyaṃ Taittirīyabrāhmaṇam Śrīmarsāyaṇācāryaviracitabhāṣyasametam. 3 vols. 3rd ed. Poona
- AUFRECHT, Theodor. 1877 Die Hymnen des Rigveda. 2 Bde. 2.Auflage. Bonn
- ANDERSEN, Dines and SMITH, Helmer Ed. 1990 Sutta-Nipāta. New Edition. Oxford: Pali Text Society
- 梵文法華經刊行会 1980 『梵文法華經写本集成』第7卷, 東京: 梵文法華經刊行会
- BLOOMFIELD, Maurice 1996 *A Vedic Concordance*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers
- DUMONT, Paul-Émile 1961 *The Full-Moon and New-Moon Sacrifices in the Taittirīya-Brāhmaṇa (Fourth Part): The Anuvākas 1-6 and 11 of The Seventh Prapāṭhaka of the Third Kāṇḍa of the Taittirīya-Brāhmaṇa with Translation*. Proceedings of the American Philosophical Society. Vol. 105, No.1, pp.11–36
- EDGERTON, Franklin. 1953 *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, 2 vols. New Haven: Yale University Press
- FAUSBØLL, V. 1877–1896 *The Jātaka. Together with its commentary being tales of the anterior births of Gotama Buddha*. 7 vols. London
- FEER, Leon 1884 [rep. with corrections 2006] *Saṃyutta-Nikāya. Part I*. Lancaster: The Pali Text Society
- FEER, Leon 1881–1898 [rep. 2000, 2001, 2001, 2008] *Saṃyutta-Nikāya. Part II–V*. Oxford: The Pali Text Society
- GEIGER, Wilhelm/ Batakrishna GHOSH/ NORMAN, K.R. 1994 *A Pāli Grammar*. Oxford: The Pali Text Society
- GOTŌ, Toshifumi. 1987 Die “I. Präsensklasse” im Vedischen. Untersuchung der vollstufigen thematischen Wurzelpräsentia. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften

- GOTŌ, Toshifumi. 2013 Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background. In co-operation with Jared S. Klein and Velizar Sadovski. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften
- HARDY, Richard 1896. 1899. 1900 [rep. 2012 Bristol, 1999 Oxford] The Aṅguttara-Nikāya. Vols. III–V. London: The Pali Text Society
- HOFFMANN, Karl 1967 Der Injunktiv im Veda. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag
- 石田智宏 2006 「法華經の梵語写本 発見・研究史概観」『身延山大学東洋文化研究所所報』第10号, pp.1–28
- 伊藤瑞叡 et al. 1993 『梵文法華經荻原・土田本総索引』東京：勉誠社
- Jiang Zhongxin. 1988. *A Sanskrit Manuscript of Saddharmapuṇḍarīka. Kept in the Library of the Cultural Palace of the Nationalities, Beijing. Romanized Text.* Edited and Annotated by Jiang Zhongxin with the Preface by Ji Xianlin. 中国社会科学出版社：北京
- 笠松直 2020 「梵文『法華經』諸伝本における動詞 *ram* の現在語幹の変遷」『論集』47号, pp.(37)–(56)
- KERN, H. and NANJIO, B. 1908–12 *Saddharmapuṇḍarīka*. Bibliotheca Buddhica X: St. Petersburg
- 小槻清明 2005 「ケルン・南條本」再考『東洋哲学研究所紀要』第21巻, pp.204–194
- KOTSUKI, Haruaki. 2003 *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from University of Tokyo General Library (No. 414). Romanized Text.* Soka Gakkai
- KOTSUKI, Haruaki. 2010 *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from Cambridge University Library (Add. 1684). Romanized Text.* Soka Gakkai
- KOTSUKI, Haruaki. 2014 *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the Asiatic Society, Kolkata (No. 4079) Romanized Text.* Soka Gakkai
- 小槻清明 2017 「ギルギット・ネパール系梵文法華經写本の一考察」『東洋学術研究』第56巻2号, pp.207–200
- V.P. LIMAYE/R.D. VADEKAR Ed. Gandhi Memorial Edition 1958 *Eighteen Principal Upaniṣads. (Aṣṭādaśa-Upaniṣadaḥ). Vol. I* (Upaniṣadic text with parallels from extant Vedic literature, exegetical and grammatical notes) Poona (Vaidika Saṁsodhana Maṇḍala)
- MARCINIAK, Katarzyna. 2019 *The Mahāvastu. A New Edition. Vol. III.* Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XIV, 1. The International Research Institute for Advanced Buddhism. Soka University: Tokyo
- MARCINIAK, Katarzyna 2020 *The Mahāvastu. A New Edition. Vol. II.* Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XIV, 2. The International Research Institute for Advanced Buddhism. Soka University: Tokyo
- MIZUFUNE, Noriyoshi. 2011 *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the British Library (Or. 2204). Romanized Text.* Soka Gakkai
- NARTEN, Johanna 1964 *Die sigmatischen Aoriste im Veda.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz

- OLDENBERG, Hermann/ PISCHEL, Richard 1883 [rep. 1966] *The Thera- and Therī-Gāthā*. Second edition with Appendices by K. R. Norman and L. Alsdorf. London: The Pali Text Society
- SCHROEDER, Leopold von 1900, 1909, 1910 *Kāṭhakam. Die Saṃhitā der Katha-Çākhā*. 3 Bde. Leipzig
- SCHROEDER, Leopold von 1881, 1883, 1885, 1886 *Māitrāyaṇī Saṃhitā*. 4 Bde. Leipzig
- SENART, Émile. 1997 *Le Mahāvastu. Texte sanscrit publié la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire*. 3 vols. Tokyo: Meicho-Fukyu-kai
- SUKTHANKAR/BELVALKAR/VAIDYA 1933-1966 *The Mahābhārata*. 19 vols. bound in 22. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute
- TODA, Hirohumi. 1981 *Saddharmapuṇḍarīkasūtra. Central Asian Manuscripts Romanized Text*. Tokushima
- WATANABE, Shoko 1975 *Saddharmapuṇḍarīka Manuscripts Found in Gilgit. Part two: Romanized Text*. Tokyo: The Reiyukai
- WEBER, Arbrecht Ed. 1972 *The Vājasaney-Saṃhitā in the Mādhyandina- and the Kāva-Çākhā with the Commentary of Mahīdhara*. Varanasi: Chawkhamba Sanskrit Series
- WEBER, Albrecht Ed. 1997 *The Çathapatha-Brāhmaṇa in the Mādhyandina-Çākhā with extracts from the commentaries of Sāyaṇa, Harisvāmin and Dvivedaganga*. Varanasi: Chawkhamba Sanskrit Series
- WEBER, Arbrecht Ed. 1871, 1872 *Die Taittirīya-Saṃhitā*. 2 Bde. Leipzig: F. A. Brockhaus
- WOGIHARA, U. and TSUCHIDA, C. 1934 『改訂梵文法華經』山喜房仏書林
- ZHONGXIN, Jiang. 1997 『旅順博物館所蔵梵文法華經断簡 写真版及びローマ字版』旅順博物館・創価学会

<キーワード> 『法華經』「如来寿量品」, 「良医病子」, 動詞 *śoc / śuc*, アオリスト, 禁止法
(仙台高等専門学校・准教授)